OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | エイズについて |
| Author(s) | 大里, 和久 |
| Citation | 大阪公衆衛生. 1990, 58, p. 7-9 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/83644 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

トピックス

# エイズについて

大阪府立万代診療所
所長　大里和久

エイズ（後天性免疫不全症候群）という病名が医学の歴史に登場してから早くも10年が過ぎようとしている。当初は男性同性愛者に多発する奇妙な病気として興味本意に取り沙汰されていたが、その後徐々に全体像が明らかになるにつれて、人類がいまだかつて遭遇したことのない厄介な疾患であり、同時に地球規模での大問題であるということがわかってきた。

最新の科学であるバイオテクノロジーを駆使した研究の成果によって、エイズの原因がHIV（人免疫不全ウイルス）と呼ばれRNA型のウイルスによる感染症であり、このウイルスの標的細胞がCD４というマーカーを持った一群のリンパ球で、このリンパ球が人体の免疫反応に最も重要な役割を果たしていることから、ウイルス感染によるこのリンパ球の機能不全が日和見感染症や悪性腫瘍の発症をもたらし、遅かれ早かれ死に至るということが明らかになった。



## 最近のエイズ状況

1990年８月末までにWHOに報告された世界エイズ患者の累計は157 か国より28万人を数え、まだ発症していないがHIVに感染しているウイルスキャリアーは一千万人を優に越えるものと推定されている。

日本のエイズ患者は同年同月末までに290人が報告されているが、欧米諸国にくらべると幸いにして非常に少ない。そのうち男性同性愛者、凝固因子製剤受注者を除くと異性間性的接触によるものは男14人、女７人、その他・不明は男15人、女３人で性的接触では男女間に大差はない。また、HIV感染者は凝固因子製剤受注者を除くと203人で、その内訳は男性同性愛者89人、異性間性的接触による者81人、と両グループはほとんど等しい。

さらに、女性の感染者は61人で、このうち凝固因子製剤受注者や静注薬物乱用者は無視しうると考えられるので、ほとんどは異性間性的感触による感染とみなされ、これと異性間性的接触の男性残り20人を較べると男女比は１：３と女性が上まわっている。これらの事実から日本におけるHIV感染は男性同性愛者の特別な問題ではなく、普通の男女間の性的感触による感染症であることが明白である。

異性間性的接触による感染では感染源は外国人、あるいは感染地は海外というのが多数存在する。これを裏付けるように、万代診療所がHIV抗体検査希望者に行ったアンケート調査によると、外国人との性的接触が理由とした者が男８％、女６％あった。海外との往来がますます盛んになるであろう今後と、男性のみならず女性も群れをなして海外へのセックスツアーに出かける昨今の風潮から、外国人との異性間性的接触が今後最も危虞されるHIV感染ルートとなるであろうことは十分に

予測される。

## 感染予防のために

医療従事者の医療事故によるHIV感染の調査が各国でなされているが、アメリカでの調査によると感染の危険があるHIV陽性血液接触事故の80％は針刺し事故で、ほかに鋭利物による切創、粘膜や開放創による汚染等があげられており、全体として1201件の事故のうち４例（0.33％）がHIV抗体陽性になったとしている。

このうち粘膜や開放創の汚染では感染者はなく、リキヤッピング中の針刺し事故が最も危険であると報告している。この結果はHIV陽性血液接触事故によるウイルス感染はB型肝炎ウイルスの場合の10％～40％に較べてはるかに低く、従ってB型肝炎感染防止の対策をきちんと履行すればそれで医療事故の予防、HIV感染の予防が十分に可能であることを示している。また、HIVキャリアーと血液中のHIV量はエイズ患者の1／100くらいであり、従って感染の可能性は遙かに低いことが明らかにされている。

日常生活における単なる接触ではHIV感染がおこらないことは、すでに多数のエイズ患者の家族や同居人の長年の追跡調査によって明らかにされている。家族ですら感染しないのであるから、職場の同僚やクラスメート等が感染するわけはないのであるが、現実には感染の理由の恐れを理由にさまざまな迫害や差別がHIV感染者に対してなされている。科学的な事実をしっかりと教えると同時に、日々の行動の中にまで理解を深く浸透させなければならない。

万代診療所にはHIV抗体検査を希望して男女が訪れてくるが、そのなかには生半可な知識のためにエイズノイローゼに陥っている男性が少なからずいる。不思議に女性にはこのような症状がみられない。この男女差は、性交渉を持つに至った動機や性交渉相手に原因するのか、あるいは男女の性に対する生物学的な違いに由来するのか興味深い点である。

## WHOの会議で

世界的にみて、今後HIV感染の大きなルートとなるのは性行為と静注薬物乱用になると考えられる。日本では先に述べたごとく性行為による感染が最も危虞されるが、すでにアフリカやラテンアメリカではそれが現実の問題として深刻な状況になっている。これらの国々では売春に従事する女性達のHIV感染が高く、特にアフリカでは80％台という驚くべき高さの国も存在し、彼女達を介して男性へ、さらには一般女性へとHIV感染が広がっている。

この重大な事態にいかに対処するかということで昨年７月、ジュネーブのWHO本部で「HIV感染と売春に関する会議」が開催された。筆者も招かれて参加したが、参加者は医学関係はもとより、社会学、人類学、法律、統計、社会福祉などさまざまな分野の専門家からなり、特に実際に売春に従事している人々の団体の代表が参加して積極的にどしどし発言するのを聞く機会を得たことは大いなる収穫であった。

会議の結論はWHOから各国に伝達されるが、そのなかで注目されるのは各国の政府に自国における売春の存在を認めるように勧告している点である。世界には日本も含めて売春を法律で禁じている国が多数ある。それらの国々にとってこの勧告を受け入れることは、現時点ではかなりの勇気が必要とされよう。しかし、法律があっても売春はいっこうに消滅しないし、法律の適用を強化すれば闇に隠れて売春の実態は分かりにくくなる。これはエイズのような致命的な性行為感染症にとっては大問題である。

## 売春と麻薬

貧困のために「売春は問題ではなくて解決である」という国々がなお多数存在する世界では、HIV感染の蔓延防止のために売春を止めよう等のような絵空事をいっているのでは話にならないわけで、WHOの勧告は問題解決のための端緒ともいうべきものである。

売春は旧約聖書にもその記載があるがごとく古くから行われており、およそ男女が群れをなすところ必ず存在するといっても過言ではない。かくも古くから不変的に行われてい

人間の営みは立派に職業の一つであり、これに従事する人々は他の職業の人々と同じように労働者として認められ、労働者の権利や保障、保護や特典を与えられるべきである、というのが売春に従事する人々の主張である。

あまり知られていないことであるがオランダは1990年１月１日から売春を合法化し、売春従事者に組合を結成する権利を与え、労働者として認めることにしたと報じられている。エイズがもたらした大きな社会変革の一つといえよう。

HIV感染のもうひとつの大きなルートは麻薬等の静注薬物乱用であり、汚染された注射器による回し打ちである。これによる感染は欧米に多く、現実的な対応に迫られた各国は

料の注射器の提供等を行っている。麻薬と売春は結び付きやすく、薬代のために売春をするというケースが多数あり、結果として売春によるHIV感染の可能性も広げている。麻薬絡みでのHIV感染者が近年急増した国にスペインとタイがあげられるが、特に後者は依然として日本人のセックスツアーが足繁く訪れる所であり要注意である。

同性あるいは異性間を問わず性的接触によるHIV感染を予防するにはコンドームを使用することである。しかし、欧米では経口避妊薬の普及、アフリカやラテンアメリカでは貧困や無知、宗教上の理由等からなかなかその使用は社会に浸透していかない。WHOをはじめ多数の国際機関がコンドームの使用を広めるべく多くの国々で様々なプロジェクトを試行中であるが、まだまだ困難な問題が残されている。

## 社会経済からみたエイズ

最後にエイズに関する経済的な面に触れておきたい。アメリカは1990年８月31日までに14万人のエイズ患者を数え、HIVキャリアーは100万人を越えると推測されているが1982年から1989年にわたってエイズおよびHIV感染に関連して費やされた連邦出費は総額55億ドルに達し、年々増え続けている。1992年には同年だけで公的、私的を含めた全保健関連費用の1.6%、120億ドルが必要であろうと推計されている。一方、エイズ患者の早逝の結果、失われる収入と生産の損失は1991年１年で550億ドルともいわれている。患者の大多数が今後も最も高い生産年齢に属する男性であり続けることを考えるならば、トータルとしてのアメリカの経済的、社会的損失は計り知れないものといえよう。

## われわれの役割

日本は幸いにしてエイズの問題がクローズアップされるまでに、血液凝固因子製剤の分野を除いては、大したHIVの侵入を受けなかった。しかし、地球的規模でみるならばHIVの浸淫は確実に広がっている。このような外的環境の中で日本がなお低い感染率を維持し続けていくには非常な努力が要求されよう。その基本はなによりもエイズやHIV感染とそれらがもたらす諸問題についての正しい理解を広げていくことである。生半可な知識は有害以外の何物でもないことを銘記するべきである。